

ディダケーにおける「福音」 に関する予備的考察

澤村 雅史

A Preliminary Study of εὐαγγέλιον in Διδαχή

SAWAMURA Masashi

要 旨

本研究は、使徒教父文書と呼ばれる文書の中でもディダケー（十二使徒の教訓）と呼ばれる文書と、新約聖書・マタイによる福音書の関係を明らかにすることを通じて、キリスト教という宗教の起源に関する学術的な探求に寄与することを目的とした一連の研究の中に位置づけられる。

本研究ではディダケーを巡る研究史と現在の研究状況を概観したのち、マタイ福音書とディダケーの関係を解明する鍵の一つとして、ディダケーに四箇所現れる「福音」（εὐαγγέλιον）の語の意味内容について解明するため、予備的考察を行う。

キーワード：ディダケー、マタイによる福音書、使徒教父、受容史、εὐαγγέλιον、Didache, Gospel of Matthew, Apostolic Fathers, reception history

1. 問題の所在

いわゆる使徒教父文書の中でもディダケー（十二使徒の教訓）と呼ばれる文書は、ひととき特殊な性格を持っている。

それは、古くからその存在が伝えられ、また権威が認められてきた一方で、本文自体は長らく失われ、11世紀に成立したと考えられるエルサレム写本（写本番号 H54）に記された本文が19世紀に発見されてようやく全体像に至る筋道が開かれたからである。

そして、このことが示すように、現存する写本がどの程度「原形」をとどめているかについては確定が困難であるという事実も、ディダケーの特殊性を際立たせている。

エルサレム写本の発見以来、初期キリスト教におけるこの文書の位置づけや新約諸文書（なかでも福音書）との関係について、おびただしい学術的関心が寄せられてきた。かつては素朴

にディダケーにおける福音書（とくにマタイ福音書）からの「引用」が論じられたが、その後、文書自体の成立年代や執筆の場所や背景状況を確定することの困難が明らかになるに従って議論はより複雑化し、単純に福音書からの「引用」を論ずることはできないという認識が広く共有されるようになった。さらに、ディダケー全体の統一性や性格についてさえも議論が生じている。

すなわち、この文書の初期キリスト教における位置づけについては確固たる結論を見出す糸口のないまま研究状況は一種の隘路に陥ってきたのであるが、近年の国際的新約聖書学界ではその突破口を見出そうとする試みが再び活発化しようとしている。

本研究ではそれらの動きに触発されつつ、筆者がこれまで取り組んできた、マタイ福音書の受容史をカギにキリスト教の起源を探究しようとする試みの一環として、ディダケーとマタイ福音書の関係を論ずるにあたり、ディダケーにおける εὐαγγέλιον の語の指示内容についての予備的考察を行う。

2. ディダケーについて

1873年に東方教会の神学者で後にニコメディア大主教となるフィロテオス・ブリュエンニオス (Philotheos Bryennios) がコンスタンティノーブルの聖墓修道院 (the Monastery of the Holy Sepulchre, 別名エルサレム修道院 Jerusalem Monastery) の図書室で発見した120葉からなる羊皮紙写本には、「公証人かつ罪びとであるレオン」(Λέων νοτάριος καὶ ἀλείτης) の署名とともに1056年6月11日火曜日という日付が記されていた。含まれる9つの文書のうちフォリオ76a-80bには διδαχὴ τῶν δώδεκα ἀποστόλων (十二使徒のディダケー [教え]) と Διδαχὴ κυρίου διὰ τῶν δώδεκα ἀποστόλων τοῖς ἔθνεσιν (十二使徒を通して諸民族への主のディダケー [教え]) という二種類の表題が記されていた。10年後の1883年に公表された校訂テキストは、以来、現存する中では最も完全に近い「ディダケー」本文として多くの学術的関心を惹きつけてきた。

しかし、その末尾は結びの句にしてはやや唐突な終わり方をしており、これが本来のディダケーの結びであるのかについては疑義がある。またその内容も、性格が異なる複数の部分から構成されており、この混成的性質 (composite nature) が本来のものであるのか、あるいは成立後11世紀までの間に編集や付加が行われたのかについては確定することが困難である、という問題がある。

一方で、ディダケーと呼ばれる文書が初期キリスト教において一定の位置づけを得、その權威が認められていたことは広く知られている。4世紀の教会史家エウセビオスによる『教会史』Ⅲ-25は、初期の教会において「使徒のディダケー [教え] と呼ばれるもの」(τῶν ἀποστόλων αἱ

λεγόμενα Διδαχαί) をどう扱うかについて様々な意見があったことを報告しており、彼自身は偽典 (νόθα) に含めるのがふさわしいと述べているものの、除外すべきであるという意見や、「認められた」ものとして扱うべきという意見があったことが記されている。

また、後に新約正典の基準となった367年のアタナシオスによる第39復活祭書簡のリストでは、旧新約の正典に続いて「正典と認められてはいないが、新しく(教会に)加わり信仰のことは学ぼうとする者たちに父祖たちが読むことを勧めてきた『他の書物』」(ἕτερα βιβλία τούτων ἐξῶθεν, οὐ κανονιζόμενα μὲν, τετυπωμένα δὲ παρὰ τῶν πατέρων ἀναγινώσκεσθαι τοῖς ἄρτι προσερχομένοις καὶ βουλομένοις κατηχεῖσθαι τὸν τῆς εὐσεβείας λόγον) として挙げられた中に「使徒によるとされるディダケー [教え]」(Διδαχὴ καλουμένη τῶν ἀποστόλων) が言及されている。

ただし、これらのリストは本文を伴っていないため、ここに挙げられている「ディダケー」が、我々がH54を通じて手にしているディダケーと同じものであるかどうかについては決定できない。そして、エウセビオスやアタナシウスのリストより早期に、2世紀末から3世紀初頭に書かれたとされるムラトリ断片の目録が挙げる(権威ある文書として)「受け入れられている」もの、それに次ぐ「読まれるべきもの」、異端的として「受け入れない」ものというカテゴリーのいずれにおいても、ディダケーは言及されていない。

一方で、古代の文献の中にはH54と共通するテキストや、その古代語訳と思われるテキストを含むものがあり、現存するテキストが権威あるものとして扱われていた形跡と考えることは可能である。

アレクサンドリアのクレメンスの「ストロマテイス」(*Strom.* 1.20, 100.4) には γραφή によるものとして (ὕπὸ τῆς γραφῆς), *Did.* 3.5と大部分で一致する章句が記されており、ディダケーが何らかの権威をもって受け入れられていた可能性を見るのが可能である¹。

4世紀末にシリアで著されたとされる「使徒教憲」(*Constitutiones Apostolorum*) には、信者の生活指針や典礼、教会における職制などについての教説の中にディダケーに由来すると考えられる部分が存在する。

また、やはり4世紀に属し、護符としての用途が類推されるオクシリコス・パピルス1782に記された内容はディダケーの一部と考えられ、同文書が何らかの権威を持っていたことが伺われる。

3. 新約諸文書との関係について

前述のようにH54の発見、そして校訂テキストの発刊以来、ディダケーは多くの学術的関心を集めてきたが、その一角を常に占めてきたのはディダケーと正典テキストとの関係である。

すなわちディダケーは旧新約テキストをどのように引用あるいは参照しているか、という問題はこのテキストの性格や成立背景を読み解くうえで極めて重要かつ有効な問題として扱われ、中でもマタイによる福音書との関係については、数多く論じられてきた²。それは主に *Did.* 8:2と *Matt* 6:5-13³における逐語的一致、洗礼における三位一体定式への言及 (*Did.* 7:1と *Matt* 28:19) など、語句のみならず神学的な内容においてもマタイ独自の章句との近似が見出されるためである。

使徒教父文書を含む初期キリスト教諸文書とマタイ福音書の関係についての網羅的な研究を試みた Édouard Massaux (1990-1993) は、ディダケーにおけるマタイ福音書の影響を疑いのないものとしている。Massaux は、ディダケーの成立を第一クレメンスやバルナバの手紙と同じく使徒教父文書の中では最初期に成立したものであるという、彼以前の通説 (the old positions) に敬意を払いつつ、ディダケーによるマタイの扱いはむしろユスティヌスに近い印象を受けるとして、ディダケーの成立をより後代に置くことの正当性を述べ、想定される成立年代順に研究対象を並べた彼の著作の最後に取り扱っている。

Massaux は、そもそもディダケーの表題そのものがマタイ福音書28章の結びの句に呼応していると考え、ディダケーがマタイ福音書を受けて書かれたものであるという立場をとり、それゆえ、ディダケーの章句とマタイ福音書との密接な関係を広範に見出している (Massaux, 1993: 144-176)。

一方で、ディダケーを含む使徒教父文書と福音書の間には直接の関係はないと論ずるのは Helmut Köster (1957) である。Köster は、使徒教父の時代に福音書がまだ正典的な権威をもつに至っていなかったとして、両者に共通する句は口頭伝承に由来していると説明する。

ディダケーと福音書との関係を明らかにしようとする学術的な試みは以来、Massaux と Köster を両極としつつ、様々に繰り返されてきた。

John Kloppenborg は自身もこの問題に取り組むにあたり、研究史上の議論を六つの類型に分けてまとめている (Kloppenborg, 2005: 105)。(a) Massaux らによる、ディダケーは書巻として成立したマタイ (およびルカ) 福音書に依拠しているという説、(b) 青野太潮 (1979: 164-89) による、ディダケー著者は文書としての福音書の存在は知らないが、共同体における口頭での「ことば集」の使用からマタイの句を知っているという説、(c) Garrow (2012) による、マタイがディダケーに依拠しているとする説、(d) ディダケーと福音書は互いに独立しており、共通する前共観福音書的口頭伝承 (oral pre-synoptic tradition) に依拠しているという説 (Audet, 1958: 166-86他)、(e) ディダケーは Q もしくは類似の資料を用いているという説 (Bartlett-Lake, 1905: 30, 33, 35-36; Kloppenborg, 1979: 54-67)⁴、(f) ディダケーは他の何らかのイエス語録に基づいているという説 (Drews, 1904: 53-79他)、である。これらの説を紹介した後で、また近年

の研究がディダケーによるマタイ福音書の直接参照あるいは文献的依存を困難とする方向に傾いていることを紹介しつつ、Kloppenborg は *Did.* 1:3b-2:1 (マタイ福音書の山上の説教と近似するように見られることから *sectio evangelica* / *Gospel section* と呼ばれる) と共観福音書ならびに Q の関係を逐語的に検証し、ディダケーとマタイ福音書が一致する箇所はマタイが Q をそのまま受け入れている箇所に限定していると指摘している。すなわちディダケーによるマタイ福音書引用の可能性については否定的に評価している (Kloppenborg, 2005: 113-129。とくに 129)。

また、Jonathan Draper (1991: 355) はディダケーの由来をマタイ福音書を生み出した共同体(群)に求め、ディダケーの部分的な成立はマタイ福音書に先行するとしつつ (Draper, 2010: 10) 両者は単純な参照関係というよりは複雑な相互形成的な関係にあるとしている。

以上のように、ディダケー研究におけるマタイ福音書の影響を論ずる視点は、かつてのように成文化した福音書の引用や参照を前提とするものから、両者の接点を共通の口頭伝承に求めるものや、あるいは部分的にディダケーの先行を仮定するものへと移ってきている。

しかし、ディダケーにおいて福音書の引用あるいは参照を認めるにせよ、否定するにせよ、議論の根本的な解決が困難である最大の理由は、やはりディダケー原本の成立年代を確定できない、ということにある。

4. ディダケーにおける εὐαγγέλιον

一方で、近年なおディダケーによるマタイ福音書の直接参照あるいは文献的依存を認めようとする学者たちが注目する要素は、ディダケーに四箇所現れる εὐαγγέλιον の語である (*Did.* 8:2; 11:3; 15:3, 4)。初期のディダケー研究者たちは、この語が正典の福音書を指していると考え、それゆえディダケーのマタイ依存の強い証拠として受け止められてきた。

たとえば、前述のとおり Massaux は εὐαγγέλιον がマタイ福音書であることに疑いを持っていない。やや近年でも佐竹明訳「十二使徒の教訓(ディダケー)」(佐竹, 1998: 27-40) は *Did.* 8:2 と 11:3 に「福音書」の訳語をあて (15:3-4 は「福音」)、マタイ福音書の箇所への引照を指示している。

しかし Köster (1990: 1-5) は新約正典における福音書が「福音書」と呼ばれている文献的証拠は 2 世紀半ばあるいは後半になってようやく見られるのであって、むしろ初期のキリスト教徒たちにとってはこの語は口頭伝承 (παράδοσις) を指すものであったと主張している。とくにパウロにおいては、若干の例外 (1Thess 3:6 など) を除き、この語の名詞あるいは動詞の用例はキリスト教的ケリュグマ (宣教内容) を指していると Köster は述べる。

James A. Kelhoffer (2004: 1-2) は Massaux の立場をマキシマリストと呼んでその問題性を指摘しつつ、Köster のアプローチは極端なミニマリストであるとして、両者の対立を超えて議論を先に進めようと試みている。そしてディダケーの部分的先行を認めつつ、ディダケーの中に εὐαγγέλιον が書かれたものを指すようになった経緯の痕跡を見出すことができるとしている。

Kelhoffer は、パウロ書簡やマルコ16章の例を挙げて εὐαγγέλιον が書かれたものを指して使われることはなかったという Köster の主張はまったくもって正しいが、しかし、書かれたものを εὐαγγέλιον と呼ばずに参照している可能性を見落としていると指摘し、その例としてポリュカルポスの例を挙げている。Köster (1990: 20) がやはり正しく指摘するように、ポリュカルポスはマタイ福音書やルカ福音書を知っていながらそれを εὐαγγέλιον とは呼んでいない。しかしそれはむしろ、書かれた福音書を εὐαγγέλιον と呼ばずに用いる例があったことを示していると Kelhoffer は指摘する (Kelhoffer, 2004: 3, n. 7)。

Kelhoffer は Köster が、初期キリスト教において権威ある文書を εὐαγγέλιον と呼び、その権威に基づいて教会形成をしようとした最初の例をマルキオンに求めるというテーゼに固執するあまり、2Pet 3:15b-16がパウロの手紙を γραφή と呼んでいることや、マルキオンよりやや時代が下るユスティノスが *I Apol.* 66.3で ἡ καλεῖται εὐαγγέλια や *Dial.* 10.2で τῷ λεγομένῳ εὐαγγελίῳ と、あたかも εὐαγγέλιον を (すでに) そのように呼ばれているものとして受け入れているかのような表現を用いていることに十分注意を払っていないと批判している。そして権威ある文書を εὐαγγέλιον と呼ぶことはマルキオンによる発明ではなく、彼以前に受け入れられつつあったことであり (それゆえマルキオンはこの語について特段の説明を加えていない)、その起源はディダケー、そしてそれより前に遡るという可能性を指摘している (Kelhoffer, 2004: 3-5, 32)。

Kelhoffer は自身の主張の根拠としてディダケーにおける εὐαγγέλιον の個々の用例の分析を試みている (Kelhoffer, 2004: 16-28)。その際に彼は Christopher M. Tuckett (1989: 197-230) に同意するかたちでディダケーが混成的文書であることを認めている。このことは「ディダケー全体」と「マタイ福音書」全体といった対照関係を論ずる上では不利となるが、他方で箇所ごとに異なる参照関係同士の整合性に囚われる必要がないことになる。

まず *Did.* 8:2についてはルカ11:2-4 (あるいは Q^{Lk}) との相違およびマタイ6:9-13 (あるいは Q^{Mt}) との一致が大きいことや、ディダケーとマタイ福音書との相違点についても参照関係を前提とした説明が可能であることから、Kelhoffer は前述の Kloppenborg による *sectio evangelica* に対するものとは異なる判断、すなわちマタイ福音書 (あるいは Q^{Mt}) への資料的遡及を見出している。そして、その根拠からここでの εὐαγγέλιον はマタイ福音書 (または Q^{Mt} のような前マタイ資料) を指していると考えられるという。

次に *Did.* 11:3-4とマタイ10:40-41に観察されうる一致要素は、マタイ福音書自体への直接参

照を示す証拠というには弱いものの、*Did.* 11:3における εὐαγγέλιον がマタイ10:40–41を含む何らかの「書かれた福音」(evangelium scriptum) であるという議論を十分に裏付ける (plausibly support) 要素だと Kelhoffer は述べている。

また、*Did.* 11:3が示すのはディダケーの著者と読者の間に εὐαγγέλιον の内容についての共通理解があることであり、それは *Did.* 15:3, 4における2度の用例に関しても同様であるという。ただし *Did.* 15:3の用例は、これが「書かれた」ものであることを、他の用例に比してさほど強く示すものではないと Kelhoffer は認めている。他方、*Did.* 15:4の οὕτως ποιήσατε ὡς ἔχετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ τοῦ κυρίου ἡμῶν (「我らの主の福音においてあなた方が持っている通りそのように行え」) は、*Did.* 11:3の κατὰ τὸ δόγμα τοῦ εὐαγγελίου οὕτως ποιήσατε (「福音の定めに沿ってそのように行え」) と同様に「行う」(ποιέω) ことの根拠として εὐαγγέλιον に言及しており、それが「書かれた」ものであることをしのばせる (reminiscent) という。

これらのマタイ福音書との共通要素をすべて考慮に入れれば、書かれたマタイ福音書をディダケーが参照していると見ることは正当であり、前マタイ資料などの存在を仮定して議論を複雑にすることは適切ではないと Kelhoffer は主張する⁵。

さらに、*Did.* 11:3, 4と15:4が前述のようにディダケーの著者と読者の間にその内容についての共通理解があることを前提としながら εὐαγγέλιον に言及していることは、ディダケーもまた権威ある文書を εὐαγγέλιον と呼ぶことを初めて発明したわけではなく、受け継いだことを示しているという (Kelhoffer, 2004: 29)⁶。

Kelhoffer の説、特に *Did.* 8:2のマタイ福音書参照に対しては Taras Khomych (2015: 455–476) が異議を唱え、むしろディダケーは記憶に基づいて祈りの文言を記していると主張し、その理由としてこの祈りが日に三度 (*Did.* 8:3) 唱えられていたことを挙げている (Khomych, 2015: 470–71)。また、*Did.* 11:3; 15:3, 4では εὐαγγέλιον はそれぞれ異なる用法をとっている上に、いずれの箇所でも書かれたものであるか否かは明らかではないとしている。

しかし、第一の指摘については、ディダケーが「書かれた」マタイ福音書 (あるいは Q^{Mt}) を手にしていた可能性の積極的な反証とはなりえない。また、第二の指摘の各々の箇所における εὐαγγέλιον の用法が異なるように見える点については、前述のとおり Kelhoffer も受け入れているディダケーの混成的性質 (composite nature) から説明を試みるのが可能である。

5. まとめと考察

以上、Massaux と Köster を両極とするディダケー研究史、そして両極間で一種の膠着状態にある研究状況に対する解決の試みとしての Kelhoffer の説について概観した。

ディダケーにおける εὐαγγέλιον がマタイ福音書を指すという Kelhoffer の説の妥当性については、(1) ディダケー以前に εὐαγγέλιον の名の成立を求めることの正当性についてのさらなる検証、(2) 四か所の εὐαγγέλιον それぞれの釈義的検証、加えて (3) ディダケーとマタイ福音書の前後関係についての検証を通して明らかにすることができると思通される。

これらの課題に今後継続的に取り組むにあたり、ここでは上記 (2) の釈義的検証に向けての予備的考察として、ディダケーにおける εὐαγγέλιον の用法そのものについて注目してみたい。

まず、*Did.* 8:2における εὐαγγέλιον は文脈からは文書であるか否かを確定できる要素は見当たらない。ここで εὐαγγέλιον を受ける κελεύω (「命じる」) も、文書と口頭伝承のいずれをも想定可能な単語である。この語は、新約聖書では1Thess 4:6にのみ名詞形 (κέλευσμα) で用いられ、そこでは大天使の声や神のトランペットといった音声を伴う「号令」を意味している。この点からは、むしろ口頭伝承を支持する要素となり得る。

次に *Did.* 11:3ではその δόγμα に従ったふるまいが勧められている。この語は新約聖書では名詞形でルカ2:1や使徒17:7では皇帝の「勅令」を意味して用いられ、エフェソ2:15およびコロサイ2:14では律法の「定め」(新共同訳では前者は「規則」、後者は「戒律」)、使徒16:4ではパウロとテモテによって各地の教会に広められた「定め」(新共同訳では「規定」)を指しており、ディダケー以外の使徒教父文書では *Barn.* 1:6や *Ign. Mag.* 13:1において「教え」の意味で用いられている⁷。これらの例からは、*Did.* 11:3において単に「εὐαγγέλιον に従って」ではなく「εὐαγγέλιον の δόγμα に従って」という表現がとられていることには、文字化された εὐαγγέλιον が意図されていることが類推される。

また、*Did.* 15:3, 4では特定の教えを εὐαγγέλιον のうちに「持つ」(ἔχω) ことが述べられている。Bart D. Ehrman (2003: 441) は「学んだ」(have learned)、Michael W. Holmes (2007) は「見出した」(find) と訳し、εὐαγγέλιον を口頭伝承あるいは文書のいずれかに限定することを避けているが、いずれも ἔχω の本来の意味にはない意識である⁸。一方で佐竹訳 (1998: 38-39) は(福音に)「記されている」と訳しており、明らかに文書化された εὐαγγέλιον を意識している。佐竹訳も意識ではあるが、ἔχω を「教えの内容が書かれた福音書のうちにある」という意味にとるならば、これらの中では佐竹訳が適切と思われる。Kurt Niederwimmer (2008: 204-205) もこの表現は何らかの書かれた福音書を意味しているように思われるとし、マタイ5:22もしくは18:15-17との内容的な符合に言及しているが、実際にディダケーがマタイ福音書そのものを参照しているかどうかについては確定できないとしている。

このように、それぞれの箇所における εὐαγγέλιον の用例からすれば、マタイ福音書との逐語的符合という点からはもっとも強く「書かれた」εὐαγγέλιον を示唆する *Did.* 8.2には「書かれた」εὐαγγέλιον を示す要素はもっとも薄い。しかし、*Did.* 11:3; 15:3, 4の三例は、ディダケーに

における εὐαγγέλιον が何らかの文書資料を指しているとする解釈を支持する要素に数えることができると考えられる。

注

- 1 オリゲネスの「諸原理について」(Περὶ Ἀρχῶν) 3巻2章7節と *Did.* 3:10の一致も指摘されているが、これはむしろバルナバの手紙もしくは独立した伝承に由来する可能性が高いとされる (Niederwimmer, 2008: 7-9)。
- 2 ディダケーの研究史については Wilhite (2019a: 266-305, 2019b, 63-64) 参照。
- 3 以下、書巻全体をさす場合にはカタカナ書きの書名(例: マタイによる福音書)、聖書箇所への指示には略記(例として Matt 5:13-14)を用いる。
- 4 Kloppenborg (2005: 106, n. 6) は Köster (1957: 159-241) をこのカテゴリーに含めている。
- 5 ここでは Kelhoffer は箇所ごとに検討するという彼自身の前提を乗り越えてしまっているように思われる。
- 6 Kelhoffer (2004: 31-34) は εὐαγγέλιον の呼称はマルコ 1:1 に遡ると考えている。
- 7 Gerhard Kittel, “δόγμα,” *TDNT* 2: 232.
- 8 “ἔχω,” *BDAG*, 420-22; Niederwimmer (2008: 203) は 15:3, 4 のそれぞれにおいて ἔχετε を “you have received” と下線部を補って訳している。

*本研究は2020年度広島女学院大学学長裁量経費助成を受けて行った。

参 考 文 献

- 1) ディダケー本文と訳、および辞典
Didache. The Apostolic Fathers vol. 1. Edited and translated by Bart D. Ehrman. LCL. Cambridge: Harvard University Press, 2003.
Didache. Apostolic Fathers: English Translations. Edited and translated by Michael W. Holmes. Grand Rapids, MI: Baker Books, 2007.
 佐竹明訳「十二使徒の教訓 (ディダケー)」, 荒井献編『使徒教父文書』講談社学芸文庫, 1998年, 27-40頁。
 Danker, Frederick W., Walter Bauer, William F. Arndt, and F. Wilbur Gingrich, eds. *Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*. 3rd ed. Chicago: University of Chicago Press, 2000.
 Kittel, Gerhard, and Gerhard Friedrich, eds. *Theological Dictionary of the New Testament*. Translated by Geoffrey W. Bromiley. 10vols. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1964-1976.
- 2) 二次文献
 Aono, Tashio. *Die Entwicklung des Paulinischen Gerichtsgedankens bei den apostolischen Vätern*. Europäische Hochschulschriften 23/Theologie 137. Frankfurt am Main-Bern-New York: Peter Lang, 1979.
 Audet, Jean Paul. *La Didache, Instructions des Apôtres*. Études Bibliques. Paris: J. Gabalda, 1958.
 Bartlet, J. V., and K. Lake. *The New Testament in the Apostolic Fathers*. Oxford, 1905.
 Draper, Jonathan. “Torah and Troublesome Apostles in the Didache Community.” *Novum Testamentum* 33, 4 (1991): 347-72.
 ———. “The Didache.” Pages 7-26 in *The Apostolic Fathers: An Introduction*. Edited by Wilhelm Pratscher. Waco, TX: Baylor University Press, 2010.
 Drews, P. “Apostellehre (Didache).” Pages 256-83 in *Handbuch zu den Neutestamentlichen Apokryphen*, Edited

- by Edgar Hennecke. Tübingen: Mohr Siebeck, 1904.
- Garrow, Alan. *The Gospel of Matthew's Dependence on the Didache*. London-New York: Bloomsbury Academic, 2012.
- Kelhoffer, James. "How Soon a Book? Revisited: EUANGELION as a Reference to 'Gospel' Materials in the First Half of the Second Century." *Zeitschrift für die Neutestamentliche Wissenschaft* 95, no. 1-2 (2004): 1-34.
- Khomych, Taras. "Another Gospel: Exploring Early Christian Diversity with Paul and the Didache." Pages 455-476 in *The Didache: A Missing Piece of the Puzzle in Early Christianity*. Edited by Jonathan A. Draper and Clayton N. Jefford. Atlanta, GA: Society of Biblical Literature, 2015.
- Kloppenborg, John. "Didache 16, 6-8 and Special Matthean Tradition." *Zeitschrift für die Neutestamentliche Wissenschaft* 70, no. 1-2 (1979): 54-67.
- . "The Use of the Synoptis or Q in *Did.* 1: 3b-2: 1." Pages 105-29 in *Matthew and the Didache: Two Documents from the Same Jewish-Christian Milieu?* Edited by Huub van de Sandt. Minneapolis: Fortress, 2005.
- Köster, Helmut. *Synoptische Überlieferung den apostolischen Vätern*. TU65. Berlin: Akademie, 1957.
- . *Ancient Christian Gospels: Their History and Development*. Harrisburg, PA: Trinity Press International, 1990.
- Massaux, Édouard. *The Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature Before Saint Irenaeus*. Translated by Norman J. Belval and Suzanne Hecht; Edited by Arthur J. Bellinzoni. 3 vols. Macon, GA: Mercer University, 1990-1993.
- Niederwimmer, Kurt. *The Didache: A Commentary*. Hermeneia. Translated by Harold W. Attridge. Augsburg: Fortress, 2008.
- Tuckett, Christopher. "Synoptic Tradition in the Didache." Pages 197-230 in *The New Testament in Early Christianity - La réception des écrits néotestamentaires dans le christianisme primitif*. Bibliotheca Ephemeridum Theologicarum Lovaniensium 86. Edited by Jean-Marie Sevrin. Leuven: Leuven University Press, 1989.
- Wilhite, Shawn J. "Thirty-Five Years Later: A Summary of Didache Scholarship Since 1983." *Currents in Biblical Research* 17, 3 (2019): 266-305.
- . *The Didache: A Commentary* (Apostolic Fathers Commentary). Eugene, Oregon: Cascade Books, 2019.